

也、いぶかしき物なり、東山殿時代ぬり盃はなし、後に作りたるなるべし、

〔鹽尻初編九〕或人問、古へ我國の盃其形如何にやと、曰上古盃は土器のみ、漆ぬりは中世已來か、相州鎌倉教恩寺時宗に、昔平重衡千壽前と、酒宴せし盃とて寺寶にあり、大さ今の平皿のごとくにして、淺く薄し、内外黒ぬりにして、内梅花まき繪あり、是中古酒盃なり、古田織部正守能茶亭の饗に備る時、製し初し盃の形なり、近世は彌輕薄の器となれり、

〔日本國風五〕酒杯

是迄さかづきは土器なるところ、織部田古朱漆のぬり盃を物數寄せられたり、是木にて製したる塗盃世に出來たる始也と、世以て云へり、然るに東山銀閣寺に、將軍義政公製し給ひし朱漆の塗盃ありて、今寶物となる、略中これを觀れば、織部朱漆の盃の始と云べからず、たゞ盃の形ちつき、其物數奇のはじめと云となるべし、

〔水鳥記下〕甚鐵坊一二のたるをのみやぶる事付りさめやすまゐふせらるゝ事

よしのうるしにて、ためぬりにぬつたる大さん取出し、うへから下までひとつになれと引うけ、まばしたもつてぞ見えにける、

〔東照宮御實紀附錄三〕御歸城の後、三五郎木鈴に御盃下され、信國の御刀を引る、盃に三日月を蒔繪にしたれば、向後これを吉例として、三日月をもて紋とせしめらる、

〔銀臺遺事二〕一とせ關東にて尙齒會とて、七十歳以上の人を招きて、終日饗應有、御内の者共へも、其齡なるは皆々召して酒給はり、三井孫兵衛親和とて、其比高名の能書有、是も七十歳餘なりけるに、壽の字を篆文に書せて、夫を蒔繪にしたる盃を萬歳杯と名付、各の引出物とし、略下

〔浚明院殿御年賀記〕天明六年三月七日五十御賀御祝儀御規式略中

御内證獻上之品略中